口蓋扁桃に転移した肺癌例

渡邊 昭仁・片山 昭公・岡安 健至*

Palatine Tonsillar Metastasis from a Small Cell Carcinoma of the Lung

Akihito Watanabe, Akihiro Katayama and Kenji Okayasu

(Keiyukai Sapporo Hospital)

Metastasis of a tumor to the tonsil is a rare event and moreover, prognosis is typically poor. Here, we will report a case with good prognosis where a palatine tonsillar tumor which had metastasized from a small cell carcinoma of the lung was surgically excised followed by the neck dissection.

A 70-year-old male had been in our hospital for treatment of lung carcinoma. Following a history of pharyngalgia for one month, he was sent to our division for examination. A tumor mass which was partially ulcerated, was revealed in the superior region of the left palatine tonsil. Tumefied submandibular lymph nodes were palpable. A histopathological examination of biopsy material taken from the left palatine tonsil resulted in the diagnosis of a small cell carcinoma. Since the primary tumor seemed to have been removed successfully and metastasis was not observed except in the palatine tonsil, the patient was treated by radical excision of the tumor, followed by the neck dissection. After surgery the patient underwent two courses of a combination chemotherapy with CDDP+VP16+MMC, and subsequently left the hospital.

Twenty two months after surgery the patient remains stable without a relapse.

Key words : tonsillar metastasis, small cell carcinoma, radical operation

はじめに

口腔内悪性腫瘍のうち転移性腫瘍は約1%のみであり、転移性口蓋扁桃腫瘍はさらにまれである¹⁾。今回我々は肺小細胞癌の左口蓋扁桃転移症例に根治的治療を施行し、現在のところ良好な経過を得ている症例を経験した。この症例を報告するとともに文献的考察を加え報告する。

症 例

70歳、男性。

主訴：咽頭痛。

現病歴：平成8年5月頃から咽頭痛を自覚した。近医内科受診時に胸部レントゲンで異常陰影(図1)を指摘さ

れ、当院外科を紹介された。喀痰細胞診では扁平上皮癌を疑われた。当院外科に入院後も咽頭痛が消失しないために5月30日当科を紹介された。

既往歴：特記すべきことなし。

家族歴：特記すべきことなし。

耳鼻咽喉科的現症：左口蓋扁桃上極付近の突出と潰瘍を認めた(図2)。頸部リンパ節は頸下部に腫脹したリンパ節を触知した。その他は特に異常所見を認めなかった。

経過：平成8年5月30日左口蓋扁桃より生検した。病理検査結果は小細胞癌であった。平成8年6月4日左肺上葉切除と縦隔郭清術を施行した。病理検査結果は小細胞癌であった。肺癌と中咽頭癌の重複癌を考慮していた

恵佑会札幌病院耳鼻咽喉科

* 恵佑会札幌病院外科

図1 胸部レントゲン

図2 口腔内所見

が、病理組織的に肺癌の口蓋扁桃転移として矛盾しないとのことであった(図3に肺腫瘍組織と扁桃より採取組織を示した)。この時点で肺癌の切除が行われたこと、他部位に転移が見られなかったことより口蓋扁桃腫瘍に対し根治的治療を行うこととし、6月21日扁桃腫瘍摘出、

A

B

図3 A: 肺腫瘍組織(クロモグラニンA染色 ×100)
B: 扁桃腫瘍組織(クロモグラニンA染色 ×100)

左頸部郭清術を施行した。腫瘍は扁桃に局限しており周囲筋組織への浸潤は見られなかった。郭清した頸部リンパ節には転移を認めなかった。術後の7月8日よりCDDP (120 mg/body を1日目に投与)+VP16 (150 mg/body を1日目, 3日目, 5日目に投与)+MMC (12 mg/body を1日目に投与)の化学療法を2クール行い8月28日退院した。退院後約1年経過した平成9年7月に脳転移を認めたが放射線治療 (30 Gy) にてコントロールされている。現在術後1年10カ月経過しているが良好であり外来経過観察中である。

考 察

転移性口蓋扁桃腫瘍はまれであるといわれている¹⁾²⁾。本邦における転移性口蓋扁桃腫瘍の報告例は我々が渉猟しえた範囲では32例あり^{3)~32)}、自験例をいれて33例であった。転移性腫瘍が少ない理由として1)口蓋扁桃には輸入リンパ管がみられないことより転移しづらいこと²⁾、2)口蓋扁桃は細網内皮系の細胞が主体で腫瘍排除能力があること⁶⁾、などが考えられている。

口蓋扁桃転移の転移経路については前述の輸入リンパ管がないことから血行転移であろうと考えられている。その具体的な経路としては原発巣から肺を介して口蓋扁桃転移とするものと、Batson 椎骨静脈叢を介しての転移経路があるものと考えられている³³⁾。自験例は原疾患が肺癌であり、さらに周囲のリンパ節浸潤もなく、頸部郭清術時のリンパ節検索でも転移が見られていないことより、左口蓋扁桃に直接血行転移したものとして矛盾しないと考えている。その他に肺癌の場合の転移形式として Brownson ら³⁴⁾は気管支鏡の際に直接口蓋扁桃にインプラテーションする可能性もあるのではと述べている。

原疾患について Brownson ら³⁴⁾は転移性口蓋扁桃腫瘍76例の報告例の検討で悪性黒色腫13例、肺癌12例、腎癌11例、乳癌11例、精上皮腫6例、胃癌5例等の順で原疾患がみられた。本邦に於ける報告例^{3)~32)}では表1にみられるごとく肺癌10例(自験例を含む)、胃癌8例、腎癌2例、肝癌2例、大腸癌2例、皮膚悪性黒色腫2例、絨毛癌2例、胆嚢癌1例、膵臓癌1例、乳癌1例、甲状腺癌1例、悪性中皮腫1例であった。本邦においては胃癌の報告例が多く、腎癌、黒色腫の報告例が少ない傾向が見られた。また、肺癌はいずれも高い頻度で見られていた。

肺癌の口蓋扁桃転移症例を本邦報告例³⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹⁴⁾²⁰⁾²⁵⁾²⁶⁾²⁹⁾³⁰⁾

表1 本邦に於ける口蓋扁桃転移報告例の原発部位

原 発	症 例 数
肺	10
胃	8
腎 臓	2
肝 臓	2
大 腸	2
皮 膚	2
絨 毛	2
胆 嚢	1
膵 臓	1
乳 腺	1
甲 状 腺	1
胸 膜	1

(表2)と Brownson ら³⁴⁾の検討例を比較してみると、性別はいずれも男性のみであった。年齢は本邦では47歳から70歳までで平均60歳で Brownson ら³⁴⁾の44歳から71歳までで平均58歳と同様であった。転移側の検討では、本邦報告例においては両側3例、右4例、左3例であり、Brownson ら³⁴⁾は両側2例で右左5例ずつでありほぼ同様であった。腫瘍細胞は本邦報告例は大細胞癌4例、小細胞癌3例、腺癌2例、不明1例であるが、Brownson ら³⁴⁾は1例の腺癌以外は小細胞癌であったと報告している。また、口蓋扁桃転移から死亡までの期間は本邦報告例では自験例は生存しているため除外し、さらに生存期間不明の1例を除外した8例の平均は7カ月であった。Brownson ら³⁴⁾は5カ月といずれも短期間であり予後は非常に悪いといえる。さらに扁桃転移時点で他の部位の転移が存在していたものは本邦報告例では不明の1例を除き、他の9例はいずれも口蓋扁桃以外にも転移を認めていた。Brownson ら³⁴⁾も83%(10例/12例)に他部位に転移を認めており、これが予後に大きく影響しているものと思われた。

これら転移性頭頸部悪性腫瘍の治療方法については、姑息的な治療方法がとられていることが多い。これは頭頸部領域の転移は原発巣からの遠隔転移であること、さらに前述のごとく頭頸部領域以外にも転移を認めることが多いことが理由として挙げられると思われる。我々は原疾患が制御されており、他に遠隔転移がないこと、頭

表 2 肺癌扁桃転移(本邦報告例)

報告年	報告者	年齢	性	扁桃転移側	組織	原発→扁桃	扁桃治療	他転移部位	予 後
1956	斎藤 ³⁾	69	男性	両側	肺癌	扁桃先行	できず	肝臓	2 ヶ月死亡
1983	宮原 ¹⁰⁾	47	男性	左	大細胞	1 ヶ月	放治	腰椎	6 ヶ月死亡
1985	周 ¹¹⁾	57	男性	右	大細胞	4 ヶ月	化療	脳, 肋骨	10 ヶ月死亡
1987	森 ¹⁴⁾	51	男性	左	腺癌	3 ヶ月	化療	後腹膜, 胸腔	6 ヶ月死亡
1990	後藤 ²⁰⁾	50	男性	両側	大細胞	4 ヶ月	化療+放治	肺扁桃	6 ヶ月死亡
1992	永井 ²⁵⁾	67	男性	両側	大細胞	扁桃先行	化療	不明	死亡
1993	松島 ²⁶⁾	52	男性	右	小細胞	9 ヶ月	放治+手術	肺	1 年死亡
1995	中川 ²⁹⁾	64	男性	右	腺癌	6 ヶ月	化療	副腎, 腎, 肺	1 ヶ月死亡
1995	秋山 ³⁰⁾	70	男性	右	小細胞	1 年 4 ヶ月	放治	肺, 脳	10 ヶ月死亡
1998	自験例	70	男性	左	小細胞	同時	手術+化療	脳	22 ヶ月生存

頸部転移腫瘍が根治治療できる状態である場合には積極的に治療を行いたいと考えている。ただし、抗癌剤に著効が期待できる腫瘍等では他に遠隔転移がみられても根治的治療態度で望むべきであるとも考えている。自験例は口蓋扁桃以外に遠隔転移がみられなかったこと、頸部リンパ節の軽度腫脹はみられたものの腫瘍は口蓋扁桃に限局していたことより根治的治療を行った。ただし、肺小細胞癌は予後が悪い腫瘍であり³⁵⁾ 今後も厳重な経過観察と化学療法を継続する予定である。

医学の進歩によりこれまで延命、長期生存が望めなかった症例も生存するようになった。それにより今後転移性頭頸部腫瘍を治療する機会が増えてくる可能性がある。原発性腫瘍のみでなく転移性腫瘍も念頭におき、診断、治療を進めていくことが必要であると思われる。

参考論文

- 1) Kutty MK and Shenoy AV : Metastatic choriocarcinoma of the tonsil following hysterectomy for an invasive mole and a period of "inactivity" of trophoblastic tissue ; report of a case. *Oral Surg* 32 : 248~252, 1971.
- 2) Crawford BE, Callahan MD, Corio RL, et al : Oral pathology. *Otolaryngol Clin North Am* 12 : 29~43, 1979.
- 3) 斎藤英雄, 飯田信長, 山田克彦, 他 : 両側口蓋扁桃に転移を見た肺癌症例. *日気食会誌* 7 : 42~47, 1956.
- 4) 猪 初男, 岡本 健, 阿部矯一, 他 : 咽頭より転移せる口蓋扁桃肉腫の 1 例. *耳喉* 33 : 77~81, 1961.
- 5) 金子善一, 栃木照子, 中島利子 : 両側口蓋扁桃の原発悪性腫瘍を思わせた胃癌の 1 剖検例. *耳喉* 36 : 415~418, 1964.
- 6) 船井洋光, 船坂宗太郎, 山口宏也, 他 : 転移性扁桃腫瘍の 1 例. *耳喉* 53 : 421~423, 1981.
- 7) 田中憲雄, 東家倫夫, 小柳義夫 : 胃癌よりの転移性口蓋扁桃腫瘍の 1 症例. *耳鼻* 27 : 811~814, 1981.
- 8) 寺尾祐一, 浅井芳江, 濱田稔夫 : Acral Lentiginous Melanoma. *臨皮* 36 : 171~176, 1982.
- 9) 三井博文, 松浦聖一, 大沼秀行, 他 : 転移性口蓋扁桃腫瘍の 2 症例. *日扁桃誌* 22 : 173~176, 1983.
- 10) 宮原 裕, 馬場克則, 仙波 治, 他 : 頭頸部領域への転移癌. *日耳鼻* 86 : 951~957, 1983.
- 11) 周 明仁, 村主好弘, 村上 泰, 他 : 転移性口蓋扁桃腫瘍の 2 症例. *日扁桃誌* 24 : 105~112, 1985.
- 12) 梅田敬子, 馬場駿吉, 横田 明, 他 : 腎癌による口蓋扁桃転移癌の 1 例. *日扁桃誌* 24 : 113~116, 1985.
- 13) 門脇敬一, 渡部哲二郎, 岩崎利通 : 胃癌による両側口蓋扁桃転移癌の 1 症例. *日耳鼻* 89 : 1443~1444, 1986.
- 14) 森 茂樹, 桜井一生, 畔柳久志, 他 : 肺癌による転移性口蓋扁桃腫瘍の一症例. *耳鼻臨床* 80 : 1261~1265, 1987.
- 15) 浅見清孝, 横井 久, 石田和也, 他 : 胆嚢癌の扁桃転移例. *耳鼻臨床* 81 : 1755~1759, 1988.
- 16) 青山仁志, 小沼政子, 三上勝也, 他 : 大腸癌よりの口蓋扁桃転移癌の 1 例. *日大腸肛門誌* 41 : 630, 1988.
- 17) 平間敏晴, 田中淳夫, 長 幹磨, 他 : 扁桃転移で発見された胃癌の 1 例. *Gastroenterological Endoscopy* 30 : 2129, 1988.
- 18) 大塚俊夫, 池内恒雄, 岩下明德, 他 : 扁桃に転移した悪性黒色腫の 1 例. *皮膚臨床* 31 : 452~453, 1989.
- 19) 持松いずみ, 富田佳代子, 高畑喜延, 他 : 他領域からの頭頸部転移症例. *耳鼻* 35 : 197~201, 1989.
- 20) 後藤達哉, 村上匡孝, 中江 進 : 両側口蓋扁桃に転移をみた大細胞型肺癌症例. *耳喉頭頸* 62 : 685~688, 1990.

- 21) 森 厚夫, 馬場 恵, 才川義朗, 他: 化学・内分泌療法に著効をしめした乳癌扁桃転移の1例. 日臨外医会誌 増51: 328, 1990.
- 22) 三武明夫, 北村 豊, 吉田洋子, 他: 根治手術後1年にて扁桃転移により再発した Borrmann 2 型進行胃癌の1例. 日消病会誌 87: 2556, 1990.
- 23) 佐藤玲子, 辺土名仁, 長島道夫: 口蓋扁桃に転移した胃癌の1例. 耳喉頭頸 64: 921~925, 1992.
- 24) 佐伯忠彦, 戸田 茂, 藤岡 博, 他: 口蓋扁桃に転移をきたした肝細胞癌の1例. 耳喉頭頸 64: 747~751, 1992.
- 25) 永井裕之, 鈴木 亨, 小塚 誠, 他: 両側扁桃転移を来した肺癌の1例. 日耳鼻 95: 766, 1992.
- 26) 松島伸治, 吉川 晃, 山本英希, 他: 口蓋扁桃に転移を来した肺小細胞癌の1例. 日呼外会誌 7: 608~612, 1993.
- 27) 坂下勤武, 斉藤 等, 都築秀明, 他: 転移性扁桃悪性上皮腫の一治験例. 耳鼻臨床 補63: 135~139, 1993.
- 28) 河合晃充, 折田洋造, 山本英一, 他: 腭癌の扁桃, 舌根部転移例. 耳鼻臨床 86: 836~845, 1993.
- 29) 中川雅文, 相馬新也, 中西文美, 他: 口蓋扁桃に転移をみた肺癌症例. 耳鼻 41: 597~600, 1995.
- 30) 秋山優子, 八木正人, 村上匡孝, 他: 転移性口蓋扁桃腫瘍の1例. 日赤医学 47: 247~250, 1995.
- 31) 山内博幸, 西平茂樹, 平野 裕, 他: 胃癌からの転移性口蓋扁桃腫瘍の1例. 耳喉頭頸 67: 650~654, 1995.
- 32) 須小 毅, 渡辺哲生, 黒野祐一, 他: 扁桃転移を来した胃癌の1症例. 口咽科 8: 77, 1995.
- 33) Draizin D, Matucci K and Rothfeld S: Bilateral metastatic tonsillar disease due to renal-cell carcinoma. Ear Nose Throat J 57: 477~480, 1978.
- 34) Brownson RJ, Jaques WE, LaMonte SE, et al: Hypernephroma metastatic to the palatine tonsils. Ann Otol Rhinol Laryngol 88: 235~240, 1979.
- 35) Warren WH, Faber LP and Gould VE: Neuroendocrine neoplasma of the lung; a clinicopathologic update. J Thoracic Cardiovasc Surg 98: 321~332, 1989.

原稿受付: 平成10年4月30日
原稿採択: 平成10年6月3日
別刷請求先: 渡邊昭仁
〒003-0027 札幌市白石区本通14丁目北1-1
恵佑会札幌病院耳鼻咽喉科